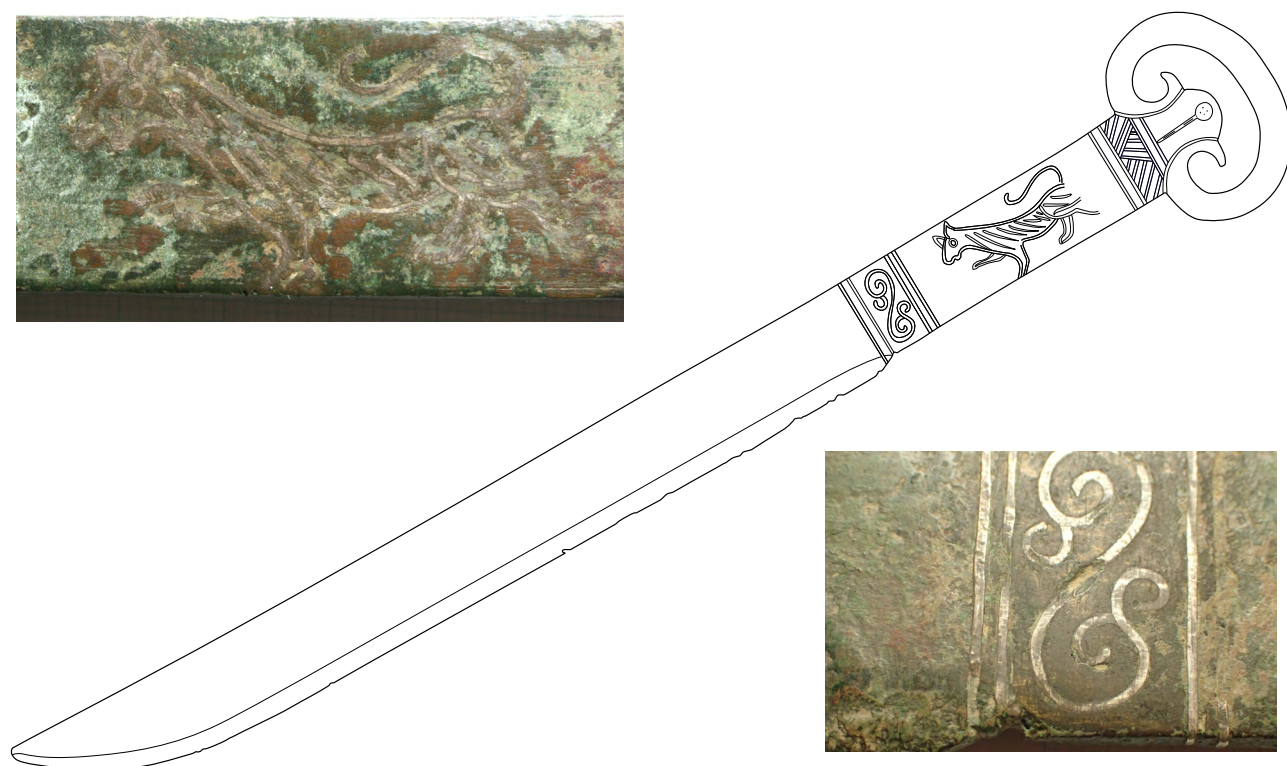


March 2020

京都大学総合博物館 ニュースレター



中央：銀象嵌青銅環頭刀の実測図，左上：柄の獣紋（部分），右下：柄のS字紋（部分），（4, 5ページに関連記事）

特別展「文化財発掘 VI－幕末・近代の出土文字資料」.....	2
ロビー展示「大地は語る 2019－地球を大冒険！」.....	3
京都府立図書館との連携.....	3
総合博物館コレクション研究〈8〉	
銀象嵌青銅環頭刀の調査	4
招へい研究員の紹介	6
研究資源アーカイブ通信〈18〉	
芦生研究林の16ミリフィルム・ガラス乾板	7
総合博物館日誌（2019年11月～2020年2月）.....	8

2019 年度特別展 文化財発掘 VI

「幕末・近代の出土文字資料」

開催期間：2020 年 2 月 19 日(水) ～ 4 月 19 日(日)

京都大学構内には、縄文時代以降の多くの遺跡が存在している。特別展 文化財発掘は、それらから発見された遺物・遺構などを、設定したテーマに基づいて紹介するものであり、この度で 6 回目を数える。

幕末から近代にかけて、京都大学構内においては、土佐藩白川邸・第三高等中学校・第三高等学校・京都帝国大学などが設けられた。また、最後の元老である西園寺公望の京都における別邸であった清風荘は、現在、京都大学の教育・迎賓・会議施設として利用されている。今回の特別展でとりあげているのは、京都大学構内の発掘調査によって出土した、それらに係わる文字資料である。ここでは、展示品のなかから 2 点を選んで、これらに関するやや詳しい説明を加えておくことにしたい。

まず、1 つ目は、吉田南構内からみつかった軟質施釉陶器の皿である。その見込みには、長方形枠囲みで「大正四年十一月十日」、円形枠囲みで「大典^(※)祝」、高台のすぐ上には、漢数字の「三」をなかに入れた桜花、という 3 つの刻印銘がみうけられる。それらのうち、「大正四年十一月十日」は、大正天皇の即位式が挙行された年月日にあたる。大日本帝国憲法と同時に制立された旧「皇室典範」では、即位の礼および大嘗祭は京都で行うと規定されていた。それに則り、大正 4 年（1915）11 月 10 日と 14 日に、大正天皇の即位式と大嘗祭が京都御所で実施されたのであった。いっぽう、「大典^(※)祝」の「大典」は、大礼とも呼ばれ、即位式と大嘗祭をあわせた一連の儀式のことをいい、また、桜花一輪 + 「三」は、明治 27 年（1894）に制定された第三高等学校の徽章に相当する。したがって、これら事柄を勘案すると、この皿は、大正天皇の大典（大礼）をお祝いするために、ないしは記念するために、第三高等学校の注文によって作られたものの 1 枚であったと推察される。

つづいて、2 つ目は、清風荘の東隣に位置する田中関田町遺跡からみつかった、「□風荘」という墨書が存する陶器の底部片である。「□」に関しては、残画からすると、「清」と確定して誤りない。「清風荘」は、江戸時代後期に建てられた、徳大寺家の別邸である清風館を前身とする。明治 40 年（1907）8 月に、その当主であっ



軟質施釉陶器の皿の内面（一部復元）

た実則^{さねつね}から、異母弟である住友吉左衛門友純^{ともいと しゅんすい}（春翠）へと清風館が譲渡された。それに伴い、実則の異母弟で、かつ春翠の同母兄にあたる西園寺公望の京都における控邸とすることが決定される。その後、公望は、清風館の建物がひどく破損しているのをうけて、春翠の主導のもと、明治 44 年より新館の造築を行った。その主屋は、大正元年（1912）の末には、ほぼ完成するにいたっている。公望は、そうした新館に対し、旧名を保って清風荘と命名したという。この墨書陶器片がとりあげられたところは、明治時代の末以来、清風館・清風荘と同様、住友家が所有していた土地で、畑として長らく使用された。くわえて、清風荘とともに、昭和 19 年（1944）6 月に、京都帝国大学に寄贈されるにおよんでいる。よって、これら諸点をふまえると、この墨書陶器片は、大正時代以降、太平洋戦争末期以前のある時点で、清風荘から廃棄されたものであった可能性が高いといえよう。

もとより、上述の 2 点以外にも、多くの出土文字資料を出陳している。それらの観覧を通じて、幕末から近代における京都大学構内等の歴史を理解していただければ幸甚である。

（文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター

助教 笹川 尚紀）

ロビー展示 大地は語る 2019 —地球を大冒険！

2019 年 11 月 17 日 (日)

2019 年 11 月 17 日 (日) にロビー展示「大地は語る 2019 —地球を大冒険！」が開催されました。このイベントは、理学研究科地質学鉱物学教室と総合博物館が「関西文化の日」に合わせて開催したイベントで、大学院生との交流を通してより多くの来館者の方に地球科学を身近に感じていただくとともに、最新の研究成果を伝えることを目的として行っています。

今回は、博物館入口の鉱物探しのブースから始まり、ロビーにて地質学鉱物学教室の院生らが研究分野ごとの展示や、ポスターを使った研究紹介を行いました。イベントを楽しむ小中高生と共に、多くの大人の方々にも興味を持っていただき、楽しんでいただくことができたようです。そして、ミュージラボでは院生や研究員による講演が行われ、古居晴菜さんの「のぞいてみよう小さな世界」、牛丸健太郎さんの「『地質調査』って何するの?」、田口知樹さんの「ナノレベルで解き明かす『石』の記憶」



ロビー展示の様子

の題目で、最新の研究成果を交えてわかりやすくお話ししていただきました。肉眼では見ることのできないナノやミクロの世界から、フィールドワークの様子、様々なスケールでの研究のお話に来館者の方々は興味津々の様子でした。

(総合博物館 助教 白勢 洋平)

京都府立図書館との連携

総合博物館では、これまで企画展示や特別展示の際に京都府立図書館との連携した企画を開催してきました。企画の内容を紹介しますと、博物館側では展示場の一角に府立図書館が所蔵する書籍を展示または閲覧ができるコーナーを設置し、蔵書の紹介を行います。一方、府立図書館側では博物館が所蔵する標本を出張展示することで、お互いに施設や展示を紹介するといった企画です。

2019 年度の企画展「地の宝Ⅱ 比企鉱物標本」においては、府立図書館に近年新たに創設された知的な交流の



京都府立図書館「ナレッジベース」での
第三高等学校由来の鉱物標本の展示

場「ナレッジベース」を用いて、2019 年 8 月 23 日 (金) ～ 9 月 25 日 (水) の期間、博物館所蔵の第三高等学校由来の鉱物標本を展示し、関連書籍も閲覧できるようにしました。この展示では、企画展示に並んでいるものとは系統の異なる 26 点もの鉱物標本の展示を行うことで、博物館の展示を見て興味関心を持った方により積極的に府立図書館にも足を運んでいただけるような狙いとなりました。この「ナレッジベース」では、あわせて府立図書館 110 周年ミニ展示も行われ、図書館の中に新たな展示空間が演出されました。図書館と大学博物館の特色ある連携の成果を伝えるために、京都市勧業館「みやこめっせ」で 2020 年 1 月 28 日 (火) ～ 31 日 (金) の期間に行われた「令和元年度図書館地区別研修 (近畿地区)」では、上記の展示空間の再現を行いました。このような特色ある取り組みを行うことができたのは、府立図書館の丸川修館長や展示の設営に尽力された府立図書館の職員の方々のご尽力によるものです。今後も相互の施設の利用者の方々に標本や書籍にふれる多くの機会を提供していきたいと思っています。

(総合博物館 助教 白勢 洋平)

総合博物館コレクション研究〈8〉 銀象嵌青銅環頭刀の調査

今回紹介する銀象嵌青銅環頭刀は昭和4年（1929）に京都帝国大学教授の濱田耕作が将来した。装飾を有する青銅刀は国内外でも珍しく、その装飾技法の復元を目的として、2019年9月から10月にかけて九州国立博物館と京都大学総合博物館による共同研究が行われた。本稿では目視による製作痕調査、X線CTによる構造調査、および蛍光X線分析で得られた知見を報告するとともに、その知見によって今後どのような研究の可能性が開けるのか展望する。

資料の概要

本作品の現状での全長は41.5cmだが、後述するように刃部の中段以下は後補された可能性が高い。環頭の最大幅6.3cm、柄の幅は2.6cm、最大身幅は2.9cmである。環頭の輪郭は滑らかで、断面は半円形に近いが、内側もやや膨らんでいる。環頭の柄に接する部分は内転し、三葉形になっている。その中央は先端が弧状になり、両面の上段寄りに播鉢状の小さな円形の窪みと、そこから柄へと伸びる沈線が施される。沈線は三葉形部位の左右にも施される（表紙中央、図1右）。

柄の両面には銀象嵌により獣紋、複合鋸歯紋、S字紋を、柄の棟側にはS字紋の区画帯の延長上にX字状の紋様を飾る。銀象嵌部の劣化により獣紋は不明瞭になっている。片面にはネコ科動物を思わせる足先、長い尾、縦縞の表現からトラを志向したと考えられるが、鼻先がのび平坦になっており、本来のトラの特徴からは乖離している（表紙左上）。反対面の獣紋は長い尾、縦縞を持つものの、頭部の輪郭がウマに近く、動物の種別はやはり判然としない（図1右）。

本作品の銀象嵌紋様は両面にほぼ同じ意匠を飾るが、細かく見れば線象嵌の手順が表裏面で微妙に異なっていることがわかる。片面のS字紋は先にS字を描いた後2つのC字状の表現を付加しているが、もう片面はS字の途中から反り返るようにC字状の表現に接続し、もう一つのC字とS字の末端部を後から付加している（表紙右下）。

本作品の銀象嵌紋様の一部には、剥落部が見られる。そこに露出した打刻の痕跡を観察する限り、蹴彫りの単位を明確に確認することはできず、下地の刻線が連続しているように見える。

蛍光X線分析およびCT画像の解析

X線CT^{*1}による構造調査では、刀部の中段で2個体が接合されていることが判明した（図1左）。接合部は、柄側は凹形、切先側は凸形に加工されており、狭い接合面に強度を保たせる工夫がなされている。接点には、地金よりも均質で透過度の低い物質が認められ、地金より原子番号の重い金属を使って接着されているものと思われる。柄側の地金には青銅刀鑄造時のものと考えられる^す鬆や錆の進行などによる小孔が顕著に確認されたが、切先側にはそれがほとんど確認されなかった。蛍光X線分析では全体的にCu（銅）、Sn（錫）、Pb（鉛）が検出され、切先側においてのみZn（亜鉛）やAs（ヒ素）も検出された。切先側は後世修理で補われたものであろう。なお、柄側には、補鑄や部材を組み合わせたとような痕跡は認められなかった。

環頭から柄部分の蛍光X線分析の元素マッピング^{*2}では、全体からFe（鉄）、Cu、Sn、Pb、象嵌部分からAg（銀）が検出された（図2）。Cu、Sn、Pbは地金に、Agは象嵌に、Feは土壌などに由来するものと考えられる。環頭部分では、他の地金部分に比べPbが纏まって検出された。蛍光X線分析では、表層近辺の情報しか得られないため、内部の元素情報は不明であるものの、この環頭部分の鉛の局所的な分布は、埋蔵環境による腐食状況の差、鑄造時の偏析、鉛を含んだ顔料による着色の可能性などが想定される。

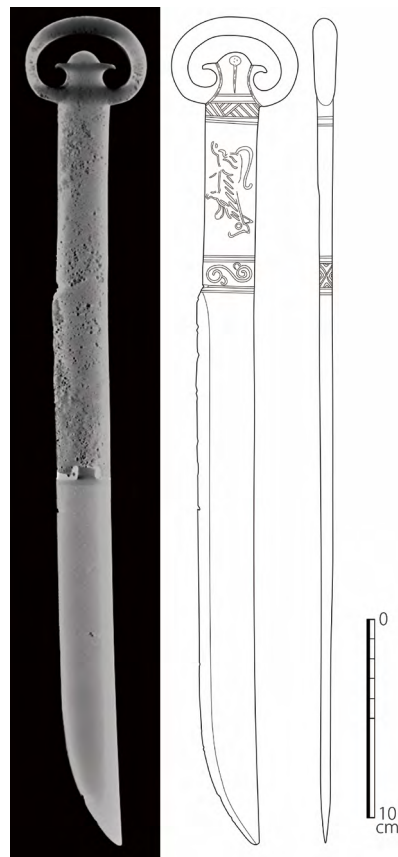


図1 左：X線CT像（九州国立博物館 渡辺祐基氏撮影） 右：実測図

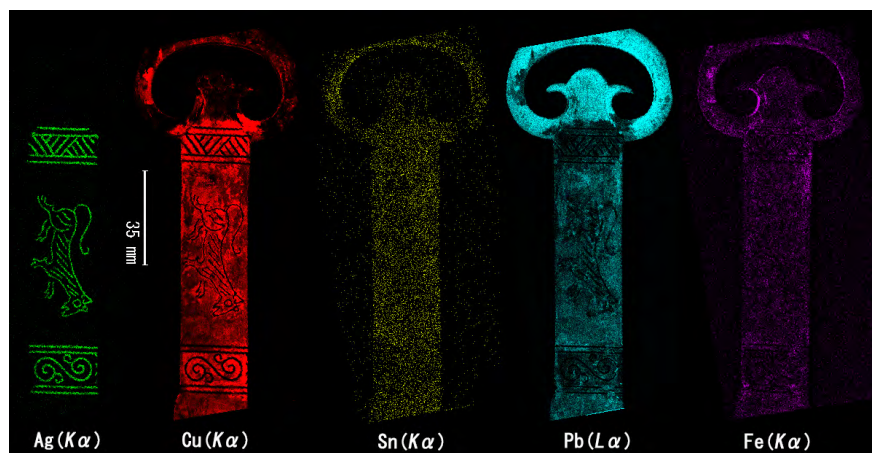


図2：元素マッピング（各左上と右下は設定の関係でデータが得られていない）



図3：環頭部分の拡大（川村撮影）

考察と展望

以上の調査結果でもっとも興味深い事象は、環頭部分の表層に集中していた鉛である。鉛の偏在については、繰り返しになるが、埋蔵環境の状況や鑄造時の偏析など非人為的なものを含めて様々な原因が想定される。しかし、数ある可能性のなかでも、これが鉛白などの鉛を材料とする顔料の着色痕と考えることについては、それなりの状況証拠がある。

銀象嵌青銅環頭刀は全体が緑色の錆で覆われている^{*3}。しかし、環頭部分はいくぶん白く霞んだような色を呈し（図3）、その範囲は図2の鉛が集中分布する範囲と重なる。さらに、三葉形部位の中央上寄りにある円形の窪みと、左右両側に刻まれた弧線の溝に目を移すと、その白さが一層際立つ。出土後、表面に付着した泥や錆を除去するに当たり、環頭部分の白色物質も恐らくほとんどが落とされたであろう。ただ、円形の窪みと溝の底は、錆を除去する工具が入りにくかったためか、原状を留めている可能性がある。

今回紹介した青銅刀と同じ、いわゆる三葉環をもつ銅刀、鉄刀、鉄剣はおもに後漢時代の墓から多数出土している。なかには環頭に鍍金が施されているものも知られている^{*4}。環頭刀は朝鮮半島と日本にも伝わり、6・7世紀には龍、鳳凰などの装飾とともに、貼金や鍍金を施した環頭をもつ「飾太刀」が流行する。佩刀時、もっとも人目につく環頭を金色に輝かせる飾太刀の着想は、三葉環に鍍金を施す漢刀にその淵源の一端を求めることができよう。

しかし、漢刀の三葉環には鍍金のほかに、顔料で着色された可能性をもつ例が銀象嵌青銅環頭刀のほかにもある。東京国立博物館所蔵の鍍金銀銅刀(TJ-3026)である。詳細は別稿に譲るが、蛍光X線分析の元素マッピングの結果によると、刀身とは別づくりの柄部分表面から鉛が集中的に検出された^{*5}。表層の鉛が剥落している箇所

からは、刀身部分と同じく銅が明瞭に検出された。このことから、青銅製の柄のパーツは鉛由来の顔料を表面に塗布した可能性が考えられる。漢時代には、表面を顔料で着色した青銅器が枚挙に暇のないほど製作された^{*6}。環頭を鍍金だけでなく、顔料の着色によって装飾した刀剣が漢時代にあったとしても何ら驚きには値しない。

今回調査した銀象嵌青銅環頭刀も、過去に調査した東博所蔵刀も、仮に顔料で着色したとすれば、着色箇所には原料となった鉱物の微粒が残留していると予測される。しかし、現時点では顕微鏡観察は実施していない。もしも鉛の微粒を認めることができれば、それは埋蔵環境や鑄造時の影響とは関わりなく、鉛由来の顔料による着色の痕跡である蓋然性がいっそう高まる。今後の研究課題としたい。

本稿は冒頭を川村と坂川が、「資料の概要」を坂川が、「蛍光X線分析およびCT画像の解析」を志賀が、「考察と展望」を川村がそれぞれ分担執筆した。図2は志賀が、実測図と表紙の写真は坂川が製作・撮影した。

（九州国立博物館 主任研究員 川村 佳男）

（総合博物館 研究員 坂川 幸祐）

（九州国立博物館 保存修復室長 志賀 智史）

^{*1} YXLON 320 kv

^{*2} HORIBA XGT-5200, 測定径 100 μm, 走査幅 138.240 mm, 画素数 512, 積算回数 4/255, 測定時間 (1 フレーム) 3540 秒。

^{*3} 切先側の後補部位表面を覆う「錆」は人工的な擬態である。

^{*4} 平壤市大同江面石巖里出土例（朝鮮總督府『古蹟調査特別報告第四冊—樂浪郡時代の遺蹟』1927年）、浙江省紹興市漓渚206号墓出土例（浙江省文物管理委員会「浙江紹興漓渚東漢墓発掘簡報」『考古通訊』1957年第2期、6—12頁）、河南省南陽市楊官寺画像石墓出土例（河南省文化局文物工作隊「河南南陽楊官寺漢画像石墓発掘報告」『考古学報』1963年第1期、111—139頁）など。

^{*5} 概要は日本中国考古学会2016年大会のポスター発表「蛍光X線分析と元素マッピングによる考古資料の新地平」で川村佳男他が報告している。

^{*6} 中野徹「中国の青銅器における塗漆と彩色について」『黒川古文化研究所紀要 古文化研究』第6号、2006年、中野徹『中国金工史』中央公論美術出版、2015年ほか参照。

招へい研究員の紹介

Alexey Shipunov 客員准教授

Associate Professor (Minot State University)

招へい期間: 2019 年 10 月 1 日 (火) ~ 2020 年 3 月 31 日 (火)



It is a great honor to be accepted for the position of Visiting Research Scholar (Visiting Associate Professor) at Kyoto University. I regard this as one of the most outstanding points in my career.

One of my most important projects over the last 20 years was the taxonomy and biogeography of *Plantago* L., the large (about 250 species), worldwide distributed genus of flowering plants. Some species of *Plantago* (for example, *P. lanceolata*, ヘラオオバコ) belong to the worst cosmopolitan invasive weeds whereas some other species (for example, the *P. hakusanensis*, ハクサンオオバコ from Japanese Alps) are rare, endemic plants, and some of them are listed in the regional red lists.

I am working with plantains from 1994, and the East Asian region always attracted my attention. One of the most notorious problems is the taxonomic borders and evolutionary relationships between species of broadleaf plantains: *Plantago major*, *P. asiatica*, *P. japonica*, and *P. hakusanensis*. Each of them is remarkable, but especially complicated is the situation with the polyploid *P. asiatica*, which has numerous intermediate forms and possibly also hybrids with other species of the genus. In 2017, I worked in Chinese herbaria and decided to continue my research in Japan, first in Tokyo and Tsukuba, and then in Kyoto. When I visited the Kyoto University herbarium at the end of 2018, Dr. Nagamasu informed me of the opportunity to work here as the visiting professor and was extremely happy when I saw that my proposal was accepted!

During the summer of 2019, together with Dr. Ikeda, the University of Tokyo, I participated in several botanical excursions in Japan and collected multiple samples which afterward were used in the molecular phylogeny pipeline, and some data (with the help of colleagues from Japan and Canada) is already available now. I also visited several important herbaria, but most of them I planned to visit during my stay in Kyoto. Therefore, from my first day in Kyoto University, I planned multiple visits to Japanese herbaria (and also visited herbaria in Taiwan). My first visits in the 2019 fall were herbaria in Chiba (CBM), Sanda (HYO), and Osaka (OSA). Each of them presented the unique local collection, with many *Plantago* samples. Especially impressive were samples of *Plantago japonica*, which is likely one of the evolutionary youngest species of plantains, close to *P. major* but native to Japan. There were also samples of *P. heterophylla*, the North American species introduced in South America and East Asia.

*P. hakusanensis*, ハクサンオオバコ

My next visits were to the large herbaria of the Makino Botanical Garden in Kochi (MBK), and then to Hokkaido (SAPS) and Sendai (TUS). Herbarium in Kochi was rich of recently collected samples from Myanmar, the region which I never had the chance to check before. Some samples were unique, and I believe that they might represent the forms new to science. Hokkaido University's herbarium is rich in samples collected in the northeast of Asia, including Sakhalin, Kuril, and Aleutian Islands. There were many discoveries. For example, my analysis of the Kuril and Aleutian plants led me to the conclusion that *Plantago camtschatica* (coastal species which grows in North Japan) likely did not cross the Aleutian "island bridge" between Asia and North America. I also hope that my visit to SAPS resulted in some increase in contacts between my Russian colleagues working in East Asia, and Japanese botanists.

Herbarium of Tohoku University (TUS) is one of the largest in Japan, and contains numerous collections of my group. There I was able to review flora of North Honshu and also collections from Ryukyus and Taiwan. It was also a great pleasure there to work, discuss, and share the botanical information with Dr. Yonekura.

My next destination is the herbaria in Taiwan, both in Taipei and Taichung. I believe that the information which I accumulate will allow me to start the taxonomical reviews of the East Asian and Pacific species of *Plantago*. First, I was able to insert the information I received in Japan (including new molecular data) into the manuscript which is prepared together with my colleagues from USA, Spain and Brazil. This manuscript is now on the review. Second, together with Dr. Ishikawa, we plan the paper about *P. hakusanensis*. Third, I already accumulated the data and ready to start my work on the *P. japonica*.

I have broad scientific and teaching interests, and among them is the teaching the machine learning methods to botanists and zoologists. I am a bit of programmer myself, developed several software packages, and hope to teach our graduate students the most important concepts of dimension reduction, clustering, supervised and semi-supervised techniques. I plan several seminars where students will practice the machine learning on biological examples and hope that it will be beneficial to the Museum and Kyoto University as a whole.

There is an exceedingly friendly working atmosphere in the Kyoto University, and I was able to finish and supply to journals four papers, and also work on several significant manuscripts, including my machine learning textbook.

The last but not the least is that I immensely enjoy the life in Japan, every piece of it, from people to landscapes, from museums to food, from language (which I studied a bit) to transportation. I am very grateful to the Kyoto University, Kyoto University Museum, and personally to Dr. Nagamasu for this fantastic opportunity. I also hope that our cooperation will continue and hope that my current position is not the last time for me in Japan.

(Alexey Shipunov)

研究資源アーカイブ通信〈18〉

芦生研究林の 16 ミリフィルム・ガラス乾板

フィールド科学教育研究センター芦生研究林（旧農学部附属演習林芦生演習林）は、1921 年 4 月に 99 年の借地契約を結んで設定され、今年ちょうど 99 年をむかえる。そこに残されてきた 16 ミリフィルムやガラス乾板写真をデジタル化する作業を進めている。

16 ミリフィルムは、編集用の機器などとともに研究林事務所に残されていたが、投影する機器もなく死蔵されている状態であった。それを今回デジタル化することによって、およそ 50 年前の様子を鮮明に知ることができた。「秋の芦生 1970」「冬の芦生 1970」などとタイトルがつけられ、無声映画だがインタータイトル（字幕）つきで編集されたフィルムもあり、学生実習に来る学生や来訪者に、豪雪の様子や植林、架線集材などの工程を知らせる教材資料であった。また、ガラス乾板写真やフィルム写真は戦前から使用されていたが、十分に活用できる状態ではなかった。今回デジタル化した写真によって、道路が整備される前に行われていた筏流しの様子などを知ることができた。

こうした資料は、当時は予想されもしなかったような様々な教育研究への活用が可能な貴重なものである。芦生研究林では 1990 年代の後半からニホンジカの過採食による植生衰退が進み、学内他部局や京都府等と協力し保全と回復に向けた取り組みを進めている。しかし、その時に大きな障害となるのが、衰退前にどのような植物種が生えていたかがわからないということである。芦生研究林のように盛んに研究が行われてきた場所であっても、データが不



写真 1：長治谷学生宿舎の前のススキ。
（「秋の芦生 1970」, 芦生研究林 16mm フィルム -023, 8:21 から）

<https://peek.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/ark:/62587/ar22883.37582/do000330726.mp4#t=08:21>

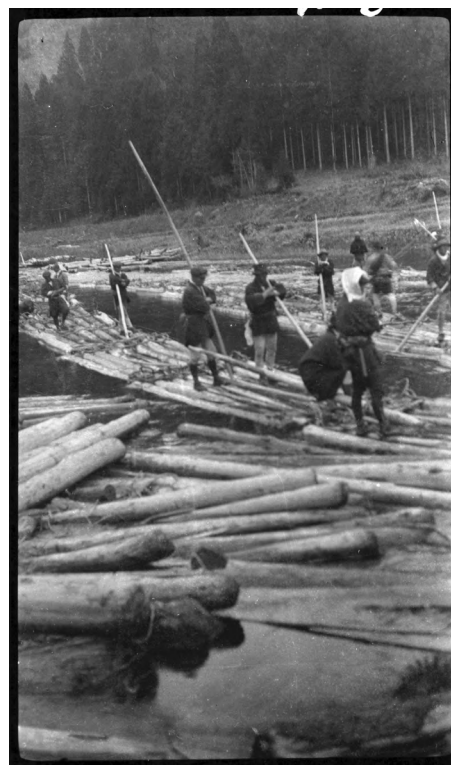


写真 2：筏流しの様子。（〈筏流し〉, 写真原板 S-16）

<https://peek.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/ark:/62587/ar22883.82538>



足している。今回公開した資料は、過去の植生や森林での人々の営みを知ることのできる貴重な資料、教材である。

伐採や台風被害、ダム建設計画、原始的植生の保護、そして国定公園の指定と、時々の時代の影響を受けつつも、芦生演習林／研究林は長い年月にわたり、京都大学の、さらに文部科学省から認定された「人と自然のつながりを学ぶ森林フィールド教育共同利用拠点」として、国内外に開かれたフィールド科学の調査研究と教育実践の場としての役割をはたしてきた。故北村四郎理学研究科名誉教授のガラス乾板写真など、まだデジタル化されていない写真も残されている。百年単位の教育研究のフィールドとして、芦生研究林の研究資源をアーカイブし、公開することで、さらなる貢献を果たしていきたい。

（フィールド科学教育研究センター

企画情報室 技術班長 榎田 盤

芦生研究林長 准教授 石原 正恵）

※いずれの写真も「京都大学演習林関係資料, 1928-1986.」より。
<https://peek.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/ark:/62587/ar22883.22883>

総合博物館日誌 (2019 年 11 月～2020 年 2 月)

展示

▶ 2019 年度企画展

「地の宝Ⅱ 比企鉱物標本」

2019 年 7 月 31 日 (水) ～ 11 月 3 日 (日)

▶ 2019 年度特別展

「文化財発掘Ⅵー幕末・近代の出土文字資料」

2020 年 2 月 19 日 (水) ～ 4 月 19 日 (日)

ロビー展示

「大地は語る 2019ー地球を大冒険」

2019 年 11 月 17 日 (日)

イベント

- 第 8 回 京都・大学ミュージアム連携スタンプラリー／8 月 24 日 (土) ～ 12 月 7 日 (土)
- 第 14 回 京都大学ホームカミングデー／11 月 2 日 (土)
- 第 17 回 関西文化の日／11 月 16 日 (土) ～ 17 日 (日)
- 第 24 回 京都ミュージアムロードクイズラリー／1 月 22 日 (水) ～ 3 月 22 日 (日)
- 2019 年度 上廣倫理研究部門年次報告会
「ゲノム編集が変える私たちの未来～ゲノム編集の人への利活用を中心に～」／2 月 1 日 (土)
「倫理的課題・概説」
澤井努 (京都大学高等研究院ヒト生物学高等研究拠点)
「治療とエンハンスメント」
赤塚京子 (上廣倫理研究部門)

「臨床応用の視点から」

高嶋佳代 (上廣倫理研究部門)

「治療としての視点から」

八田太一 (上廣倫理研究部門)

「社会との対話」

鈴木美香 (上廣倫理研究部門)

- 京都千年天文学街道 第 39 回 アストロトーク

／12 月 14 日 (土)

「母なる星、太陽の謎を探る～最新の太陽観測からわかること～」

一本潔 (京都大学大学院理学研究科／理学研究科附属天文台)

「3D メガネでみる宇宙のすがた～太陽と日食のお話～」

青木成一郎 (京都大学天文台天文普及プロジェクト室／京都情報大学院大学)

総合博物館セミナー

- 第 106 回 「Botany in North Dakota and beyond」／11 月 8 日 (金)
Alexey Shipunov (College of Biology, Minot State University)
- 第 107 回 「文化財デジタルアーカイブ活用事例と将来展望～最先端技術で文化を守り、未来につなげる～」／12 月 13 日 (金)
三枝太 (凸版印刷株式会社文化事業推進本部 VR 開発部)
- 第 108 回 「竹をみて、人を知りたい～「竹と人」の研究領域をつくる～」／2 月 14 日 (金)
岩松文代 (北九州市立大学)

他機関の展示への貸出

- 第 31 回 水族企画展示「ビワマスと仲間たち」
会期：7 月 20 日 (土) ～ 11 月 24 日 (日)
滋賀県立琵琶湖博物館 (2 点)
- 特別展「海と山的美しもの一食がつなぐ若狭と都一」
会期：10 月 5 日 (土) ～ 11 月 4 日 (月)
福井県立若狭歴史博物館 (6 点)
- 特別展「光秀と幽斎～花開く武将文化～」
会期：10 月 26 日 (土) ～ 12 月 15 日 (日)
京都府立山城郷土資料館 (5 点)
- 第 27 回 企画展「国衆からみた光秀・藤孝」
会期：10 月 19 日 (土) ～ 12 月 1 日 (日)
大山崎町歴史資料館 (7 点)
- 吉野ケ里遺跡史跡指定 30 周年記念特別展「吉野ケ里遺跡ー軌跡と未来ー」
会期：1 月 1 日 (水) ～ 2020 年 2 月 16 日 (日)
佐賀県立美術館 (4 点)
- 令和元年度図書館地区別研修 (近畿地区)
会期：1 月 28 日 (火) ～ 1 月 31 日 (金)
京都府立図書館 (26 点)
- 特別展「西播磨のやきもの」
会期：1 月 29 日 (水) ～ 2 月 27 日 (木)
たつの市立埋蔵文化財センター (1 点)
- 令和元年度企画展「戦国時代の物集女と乙訓・西岡」
会期：2 月 29 日 (土) ～ 3 月 29 日 (日)
向日市文化資料館 (2 点)

入館者数

8,379 名 (うち特別観覧：30 団体 1,228 名)

発行日 2020 年 3 月 27 日

編集・発行
〒606-8501

京都大学総合博物館
京都市左京区吉田本町

電話 075-753-3272
FAX 075-753-3277

<http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/>